

E. ヴァレーズにおけるユートピア思想

——未完の《空間》をめぐって ——

沼野雄司

本論文は、エドガー・ヴァレーズ（1883-1965）が 1930 年代から 40 年代にかけて取り組んだものの、結局は未完成に終わった大作《空間 Espace》のプランを詳細に追うとともに、新発見の資料を用いて、作品の性格と中断の理由について考察を加えるものである。当時の新聞、雑誌などによれば、《空間》は、多様な言語を用いる合唱団がアンプリファイされた管弦楽と共演し、世界の各都市を結んで同時中継が行われるという、壮大な計画の作品だった。ヴァレーズは、終楽章で用いられるテキストをアンドレ・マルローなどに発注したが、結局得ることができず、作品はやがて放棄される。

しかし近年、ザッハー財団に移管された資料から、作曲者自身の手による《空間》のためのテキストが発見された。このテキストはサンドバーク、スノーといった文学者の作品からの抜粋を再構成したもので、左翼的色彩がきわめて濃い点に特徴がある。《空間》のプランと、この新資料を当時のアメリカの社会情勢の中に置いてみると、これまでは不明だったこの作品の本質が明らかになる。

そもそも《空間》はテクノロジーと左翼思想という、2つのユートピア思想のアマルガムとして構想された。ところが、皮肉なことに、1930年代には輝かしい光彩を放っていたこれらのユートピアは、第二次世界大戦を契機にして、いずれもヴァレーズを裏切ることになる。電子音楽センター設立の失敗、そして大量破壊兵器の出現は、素朴なテクノロジーへの信仰に再考を促し、さらにはソ連という権威の失墜とアメリカにおける社会主義への弾圧は、左翼的なテキストへの再考を促すに至った。こうして《空間》を放棄せざるを得なかったヴァレーズは、その代わりに《「空間」のためのエチュード》（1947）という小品を、テクノロジーとも左翼思想とも関わらない、いわば抜け殻のような形で戦後に発表したと考えられるのである。